

# 『ゆうわのむかしっい』

(秋田県河辺郡雄和町の民話)

千葉大学日本文化研究会

民話分科会編

本書は、一九八六年（昭和六一年）十一月一日に発行された手書き謄写版刷りの民俗調査報告書『ゆうわのむかしっい』（秋田県河辺郡雄和町の民話）をリポジトリ公開用に活字化した覆刻版です。

本書を作成するにあたっては、明らかな誤字脱字等を修正したほか、漢字とひらがなの使い分け、および句読点の位置の変更等をおこなっています。

また、誤読しやすい部分には、ルビ・注釈などを付け加えたほか、地名・住居表示などは、調査当時のままで表記しています。

なお、現代では不適切な表現と思われる文章表現等については、当時の執筆者および話者からの採話を尊重して、そのままの言葉遣いで掲載してあります。

## はじめに

最近では、民話を聞くことが以前に比べると少々難しくな  
てきているような気がします。

それは、世の中にいろいろ面白いことが増えたために、子  
どもたちが民話を聞きたがらなくなって、民話をたくさん  
覚えておられた方々も話す機会がなくて、どんどん忘れて  
しまうからだともいわれています。おじいさんやおばあさ  
んに「お話」をせがんでいた子供たちが、「本を読む」こと  
をおねだりするようになったかもしれない。

私たちは民話を聞きました。「語り」に出会いたくて、テ  
ープレコーダーを片手にあちこちを歩きまわりました。そ  
して、ひとつ、またひとつと「語り」に出会うたびに、私  
たちはその楽しさ、素晴らしさを感じないではいられない  
のです。

この民話集は、そんな私たちの思いを少しでも読者の皆  
さんにお伝え出来ればと考えて作ったものです。これを読

んでくださった方々が、ご自分でも民話を聞いてみたい、  
あるいは語ってみたいと感じてくだされば、これ以上うれ  
しいことはありません。

最後に、私たちをあたたく迎えてくださった雄和町の  
皆様に、感謝すると共に心からお礼を申し上げます。

一九八六年 晴れわたる秋の日

千葉大学日本文化研究会 民話分科会一同

もくじ

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・二

雄和町の概略図・・・・・・・・・・五

雄和町について・・・・・・・・・・六

『ゆうわのむかしっこ』民話集について・・・・・・六

【民話】

斎藤家の白い蛇採話地区名(新波)・・・・・・・・七

下女の淵(新波)・・・・・・・・・・九

狐火(新波)・・・・・・・・・・九

大蛇が犬をのんだ話(町屋敷)・・・・一〇

田村麻呂と観音様(町屋敷)・・・・一一

狐にからかわれた体験談(町屋敷)・・・・一一

しゅうとめの改心(安養寺)・・・・一二

山の神様の不思議な伝説(東又)・・・・一二

ムジナにつかれた体験談(大金)・・・・一三

宝物が盗まれた話(萱ヶ沢)・・・・一四

ねずみ浄土(萱ヶ沢)・・・・・・・・一五

田沢の辰子姫(萱ヶ沢)・・・・・・・・一七

八郎潟の八郎(萱ヶ沢)・・・・・・・・一九

ツグメの薬(萱ヶ沢)・・・・・・・・二〇

女米木山の鬼(萱ヶ沢)・・・・・・二一

獅子頭の話(萱ヶ沢)・・・・・・二一

お地藏様が盗まれた話(萱ヶ沢)・・・・二二

萱ヶ沢のはじまり(萱ヶ沢)・・・・二三

伊勢参りの松(水沢)・・・・・・・・二四

伊勢参りの松の話(平沢)・・・・二四

川むかいの山に(平沢)・・・・・・二五

獅子頭の話(平沢)・・・・・・・・二六

水沢のお宮のご神体の話(平沢)・・・・二六

ご神体の石の話(平沢)・・・・・・二七

水沢のはじまり(水沢)・・・・・・二七

河童の話(平沢)・・・・・・・・二八

ひとはね沢の話(平沢)・・・・・・二八

|             |    |
|-------------|----|
| 神のおつげの話(平沢) | 二八 |
| 笹竹の話(平沢)    | 二九 |
| 狐の話①(中ノ沢)   | 二九 |
| 狐の話②(中ノ沢)   | 三〇 |
| 比丘尼淵の話(中ノ沢) | 三〇 |

【女米木地区の昔話】

|           |    |
|-----------|----|
| 狐に化かされた話① | 三二 |
| 米子の話①     | 三二 |
| 観音様の話     | 三二 |
| 洪水のときの話   | 三三 |
| 薬師様の話     | 三三 |
| お地藏様の話    | 三四 |
| 狐の話       | 三四 |
| はぎの橋      | 三四 |
| 狐に化かされた話② | 三五 |
| 米子の話②     | 三五 |

|            |    |
|------------|----|
| イシダの森の白狐   | 三六 |
| 米子の話③      | 三六 |
| 米子の話④      | 三七 |
| ムジナに化かされた話 | 三七 |
| 狐に化かされた話③  | 三七 |
| 米子の話⑤      | 三七 |

【補遺】

|               |    |
|---------------|----|
| 蛇の首かけ松(水沢)    | 三八 |
| 白根館の杉(水沢)     | 三八 |
| 鯉女房(相川)       | 三八 |
| なぞなぞ(安養寺)     | 三九 |
| 雄和町の民話(話者と題名) | 四〇 |
| 民話採訪調査の思い出    | 四四 |
| 編集後記          | 四七 |
| 民話分科会名簿       | 四七 |



## 雄和町について

秋田県河辺郡雄和町は、秋田県のほぼ中央に位置する静かな田園地帯です。まちの中央を貫くように雄物川が流れ、東を秋田市・岩城市、南を大内町、西を協和町・西仙北町、北を河辺町とそれぞれ接しています。

町の産業は、米作を中心とした農業が主体で、近年は他に肉用牛の肥育、アムスメロンの栽培もおこなわれています。昭和五六年に秋田空港が町内に開港してからは、空港関係の就労も進んでいます。

町の面積は一四五・〇二平方キロメートルで、そのうち六六％を林野が占めています。人口は昭和五五年度の統計で四五九二人、うち一次産業従事者が一五三七人で総人口の三三・五％を占めています。

昭和三一年、大正寺村・戸米川村・種平村が併合して雄和村となり、翌昭和三二年に川添村を併合して現在の雄和町になって、今年はちょうど三〇周年にあたっています。

## 『ゆうわのむかしっこ』民話集について

この民話集に収められた民話は、昭和六一年七月と九月に秋田県河辺郡雄和町で採話したものです。ただし、四月に行った女米木部落全戸調査については、再話したものをまとめて収録してあります。

ここに収めた話は、町の皆さんがお話してくださったものを直接テープレコーダーで録音し、再びテープから文字になおしたものです。文字化にあたっては、できる限りテープの原音に忠実になるよう心掛けましたが、どうしても聴きとれない部分については（・・・）と記しました。わかりづらい部分は（ ）を付して読者の便を図りました。題名は、編者が便宜的に付けたもので、配列は話者ごとにまとめてあります。

また、録音できなかつたものと、本来は、編に入れるべきであったにもかかわらず、編集上の手落ちで出来なかつたものを集めて補遺としました。

## 【民話】

齋藤家の白い蛇

(新波<sup>あらわ</sup>)

カッコ内は採話地区名

蛇の話だけどき、ここにあの、継右衛門つてうちがあつたんだつて。ところで、その人がさ、どつから引つ越してきたかはわかんないんだよね。だけど、この大正寺村つていうのはさ、やつぱり一番古いつていうの齋藤家が一番古いね。うん、齋藤家。やつぱりその内も齋藤つてうちなのね。やつぱり昔、かなり財産のあつたうちでさ。

(中略) ああ蛇。でね、その人がさ、この雄物川のすぐそばなんだ。で二人で、夫婦二人で朝早くから起きて、そしてやつぱり、その、ほら、引つ越してきただけのものだから、田もなければ畑もない、やつぱり自分で耕さなければ食われぬ。そいで開墾するす。

ところで、一ぴきの蛇が、小さい蛇がね、もうそのうちの者がもう、この辺は夏になると、夜が明けるとすぐにも

う畑に出ていくからね。そうすつと必ずその蛇が先になつていくと。ああ、こりや、不思議な蛇だもんだつて。けどすぐ川がそばなもんだから、こりや川でも魚なんかとつて食べておつた。どうにかこうにかして舟つくつたんどもわかんねえけどもさ、そいである日、舟に乗つてどつかから拾つてきたかわかんねえけども、そいで舟へ行つたらさ、その舟のへさきの方へね、その蛇が小さくなつてその舟に乗つてゐるわけだ。うん、小さいからいたずらしねえだろうつてことで舟出つたわけだ。そうすつと、舟出すとね、その蛇が川に入るんだつて。そして自分の舟より速く、その蛇が行くわけだ。

「この蛇は変な蛇だ」

そうすつと上つたり下つたりする間ね、そしてこう行くとさ、この蛇が、今度はくるうつとこう、その川の中に丸をつくつてゐるわけだ。そうしてそこへ行つて

「こらおかしいな、これ、なんか教えてるんじゃないかな」  
つて言うので、そこへ行つて網をおろすとさ、すぐ魚と

れるわけだ。

そつで次の日から、その蛇が行く通り行くわけだ。かみへ行っても、しもへ行ってもそう回るんだ。そして、またその回ってるところで上げ下ろしやると、またそこでも魚いっぱいとれるわけだ。あんまりとれるもんだから、自分ばっかりでも食い切れないもんだから、今度は村の者にちよくちよく売るわけだ。

(中略)だんだん景気がよくなってさ。そして何年かすると、特にその家はさ、男の子生まれなかった。だから養子をもらってもさ、女の子しか生まれない。そつで、そのあと何代かたってからもらった養子がさ、そのころはもう、その家は相当の財産家で、蔵も建ってたども、そいで魚とりに行くときは、やっぱりその蛇が出るわけだ。

そのうちの女方はその蛇見てる。そうすつと、蔵へは米なんか入ってるでしょ。その蛇はさ、その蔵入って米食ってるわけだ。んでまあ、その何代かのうちにもらった養子がねえ、非常にわんぱくな子供さんだった。

「蔵には絶対はいるな」

つて。わんぱくなもんだからさ、入るなって言われると、なお見たくなるわけだね。それで今度さ、入ってみたところがさ、こう蔵をのぞいてみたら、赤い目をした白い蛇がいるんだつて。

「はあ、なんとこら、うちの女たち、蔵入っちゃだめだつて言うのはこういうのいるからか、なんと人のせつかくつくった米食つて。なんてことだ。殺してしまわなきゃ」なんてね。

こつそり外へ出て、火箸、火箸つてわかる？あの火箸焼いてさ、そして今度さ、投げてやったんだつてよ。そしてそれがちょうどその首つ玉にあたったわけだ。特に目玉にあたったもんだから、蛇も、ま、大病になっちゃたんだよね。そつで今度蛇がさ、目玉からだんだん腐ってきたんだつて。その蛇が腐りしだい、そのうち…(聴き取れず)…もだんだん下火になってきたんだつて。そつで今度そのうちでさ、弁天様を祀つて、そつでお宮建てて。その御神



体はさ、そういう白い滝の上へ弁天様が乗った、そういうお姿の本尊で。

今は、新屋つてとこに引越したのね。御神体も持つてつちやった。その後、新屋へ行ってみたことないけどね。それはただ伝説として。だから、いつの時代だかつてこともわかんねえ。今の話？ それはやっぱり子供の頃に聞いたもんだ。

#### 下女の淵

(新波)

新波の小学校あるでしょ。あそこからもうちよつと萱ヶ沢の方へ行ったところに碓田いかりだというところがある。そこにやっぱなんていうか、なんかその、豪農とか財産家があつて、あの、昔の番町皿屋敷なんてそんな話きいたことあるでしょ。ああいうような話がある。

あの、その山のちよつと裏のすぐ、あの雄物川になつて断崖絶壁になつてる。んで、その家にもそういう、その南蛮渡来の皿とかなんかそういう貴重なものがあつただす。それを、その、失ってしまったか、壊してしまったか、そしてその下女が責められて、それでその崖から身を投げて死んだつていうので、下女の淵というところがある。

#### 狐火

(新波)

ちっちゃい男の子がね、コネウズつていつて苗を投げてやるんだ。その、まずアルバイトだったわけだよな。私もそれをやりに行ったわけ。帰りに暗くなつてしまつてるわけだよな。で、ずっと道歩いてきたらね、こう、やっぱり火の玉がゆらゆらつと道路のとおりに来たからね、多分自転車だと思つたの。ところが、行ったり来たり行ったり

来たりするから、何かものでも落としてさがしてるのかな、懐中電灯つけてさがしてるのかな、と思ったわけね。三十年くらい前だな・・・(聴き取れず)・・・

そしたらね、とたんにその火の玉が山の上き登っていったの。ずーっと。だからそれはね、ちよつと人の、そのあたりに道はあるんだけど、そんなにすーつとあがれるような道じゃないわけ。山道だからね。

・・・(聴き取れず)・・・あ、そういえばあれ狐の火玉だ、なつ、とかつて四、五人で見たんだな。・・・(聴き取れず)・・・でも、すーつと行って、こうT字路になつてるところここの通り過ぎて、私らが、で通り過ぎて、通つてるときは、もういなくなつてるけども、また過ぎたときにすーつとおりてきて、このへんが明るくなつてのな。

そういうのは見てるから、それで俺ばかりでねえから、あれは狐の火玉だなあつていうんだから、日常茶飯事であつたんでねえかな。

### 大蛇が犬をのんだ話

(町屋敷)

これは、あの、私のじいさんのその前の人の、その話から教えられたことだっけども、まず、そのおじいさんが山に犬を、飼う犬を連れて行つたら、大蛇にのまれてしまつた。驚いて逃げてきたども、それからそのときその、ななをぶつけたつていうんだな。その大蛇にさ。そいで無我夢中で来たら、・・・(聴き取れず)・・・その大蛇が死んで、骨が残つていたと。それでその人がその、

「この蛇め」

つてことで、足でその骨をふんずけたつたかな。そしたら、それが刺さつて、それがもつと、そのやれ死んだと。ま、そういう言い伝えがあつたとかつて。その・・・(聴き取れず)・・・ごつとだか、作り事だかわかんねつけども、そんなのすごう、聞いたこともあるんだな。

それからその、あすこの高尾山にいた、豪族っていえばいいすかな、夜叉鬼<sup>やしやき</sup>だか親子二人、征伐されたことあったってけども、それその田村麻呂が(二人)逃げたとき、亀田のあまさき村まで追いかけて行ったすども、どつちさ逃げたかわからなくなったと。

それでその田村麻呂は、束髪<sup>そくはつ</sup>ってあのよく・・・神武天皇でも、両脇のところ髪、こう折って曲げて結んであったものすな。あれ、束髪だかなんとかいって、こう耳のこ束ねた髪をいったもんだけど、それさ観音様をその、包んで歩いたもんだと。そいでその髪をほどいて、その観音様を拝んで、その夜叉鬼をば探すことできるようにと祈ったら、その観音様のようなものさ、それが現れておったと。それを持って今度は、秋田から男鹿まで・・・(聴き取れず)・・・追いかけて討伐した、なんていう話もあるわけだ。

ただ、私、やっぱりなんとなく、まんざら嘘でもないな、と思ったことは、私、昭和十一年頃であったすかな、若いときはその・・・なんていったかな。種平へ通ったもんですわな。自転車に、まずあの頃、道路も悪かったけんども通ったもんですが、それでその仕事場というやら・・・(聴き取れず)・・・酒は飲めねかったども、当時飲めねかったども・・・(聴き取れず)・・・やっぱり夜十一時頃だか十二時だか帰ったことあるすわな。

その今の妙法っていうところ、平尾鳥から妙法、ここにふじまる(？)だかっていうところあるすわな。こう、坂になってるすな。今、県道ですどもな。ここをその坂道を自転車で来るとき、その、自転車の先、そのライトをつけてきたども、自転車の先にこう、何だかその黒くなってころころ回って、その、行くんだな。そして妙法っていうところさ入る頃鳴き声でしたすわな。これはその狐が私をた

めしたんだべな、と思つて、そんなことまず一回ぐらいあつたんですね。

しゅうとめの改心

(安養寺)

これは私のしゅうとめから聞いたんだども、昔、あるところに意地の悪いしゅうとめがいたんだと。意地が悪くて嫁さいじめてばかりいたつてな。そしたら、そのしゅうとめがな、川で洗濯しておつたらな、牛さ来てな、洗濯ものひっかけて行ってしまったんだと。んだ、干してあつたのな。だからそのしゅうとめが、

「待てえ」

つて追いかけて行つたら、その牛、寺さ入つていつてな。そしたらどういふわけだが、そこんところは忘れてしまったども、その寺で説教聞いてな、説教な、それでその和尚

さんに説教してもらつたなら、すうつと気持ちやわらいでな。悪い心がなくなつたつちゅうな。それまで意地悪ばかりしていた嫁つこにもつらくあたらなくねつたつてな。説教聞いて信心ついてな。寺に毎日お参りするようになったつちゅうな(笑)。

山の神様の不思議な伝説

(東又)

あすこの杉の木んとこの山の神様、ええ、この奥の左側んとこに、山の神様、ちゅう神様がおるんすども。そのの、昔、うちの父が子供だったとき、その山の神様の御神体さ、川に持つていつて遊んだつていうんですな。そして、うちの、私の父がその御神体さ、忘れて置きっぱなしにして来てしまつたつちゅう・・・。ところがそれがひとりでに祠に戻つておつた、なんて話を聞いてるんです。

それから昔は、主婦のことをあば、と言ったけれども、

(中略) それでその山の神様んとこに(そのあばの) 安産祈願に行ったんだども、持っていったろうそくが、火をともしたとたんに、どろどろっと、あつという間に溶けてしまったつちゆうんですな。そしたら難産になって子供の方も母親の方も死んでしまったつちゆうんですな。

そういう話は、私の父も、私の父は昭和八年の一月十四日に亡くなったんだけども、やっぱりな、それで容態が悪くなったので、分家の私のおじさんにあたる人が、山の神様に拝みに行ったんですな。そしたら、そのおじさんが泣きながら帰って来て、どうしたんだって聞いてみたら、やっぱり、ろうそくがどろどろって溶けてしまったっていうんですな。

それは・・・やっぱり山の神様の知らせつちゆうかな、不吉な知らせみたいなの・・・。ええ、そんなに昔のことじやないですな。私は、この話は、私の母から聞いたんだども。

ムジナにつかれた体験談

(大金)

ほんとにあった話だけども、んだなあ、私がまだ学校卒業したぐらい、まだ子守してる頃だもな。弟か妹をおぶっていた頃だと思う。その頃にうちの母が、昔はほれ、どぶろくなんて作ったもんだすべ、うんお酒な、そして夕方に、日暮れごろに、それを一本、本家の人からもらって、ここさ(胸を指して) こう入れてきたそう。てっで私はまだ子守してたもつだから、あの昔はこれ、お嫁さんこう、歩いていったもんだすべ。今みてえに車でねえよな。

そしたつきや、そのお嫁さん見るときにみんなで、あの頃は、私方小っちゃい頃は、みんな、七人も八人も子供いたもんだから、送ったりしてみんな、お嫁さん見に道路まで出たわけ。そうしたつきや、私、急におなか痛くなって、あとどうもこうもしょうがなくて、家さ帰って、

「いって〜」

って。あしたつきやよ。

「なんのおかしいの、急になに」

ってことであっていいので、うちの母親が、ちよつとあの、何、今ではな、何ていうべな、昔はごもそなどといったものだど、拜んでやな、おろす人いるつすべ。そういう人がいたな。

そしたつきや、それ、うちの母が、あの今来るときにお酒一本もらつて来たもんだから、そいでさ、ムジナ、とかが、それがわかつてついて来たらしいだな。それが私さついたんだすべ。急ぐに腹痛くなつたんだものな。そしたつきや、

「とれとれ、ばてばて、何やってるんだ」

って（母親がムジナに向かつて）怒ってよ、そしてあの、昔はさんだら、といつてよ、わらでこう丸いもの、容器作つてな、そしてその山のそばの、道つがい（？）っていうか、三叉路みてえなそういうとこさ、赤飯ていう、今は、赤飯ていうか、赤飯でもねえけど、あずきを入れたご飯を炊いて、それをそういう三叉路とかさ、あげてくるんだな。

そうすれば、離れる、とれるとかな。そういうことはやっぱりあつたもんだな。

ほんつとの話だなあ。私はほんつとの話だと思ってるな。急にそういう風になつたな。本当にそういう目にあつたらよ。ご飯あげてきたら、けろつとなおつたからなあ。

#### 宝物が盗まれた話

（萱ヶ沢<sup>かや</sup>）

いつの時代だか分かんねえもんだけど、おらほのお寺に・・・（聴き取れず）・・・宝物があつたもんだけどな、それがその、南天の実でこしらえた鞍と、それからその黄金仏の観音様があつたもんだつたらす。それがその、エンヨウジゴウつてば、この、仙北の方にあたるわけだけれども、その、その兄弟の人がたが、やっぱ、もともとその、侍であつたものだったわけです。その宝物欲しくて、で、

和尚どこをホンザワラへ来てくれって、呼ばって、

「お茶でも」

って（酒を飲ませて）酔っつぶして、宝物盗みに来たって  
いうふうなことだな。で、寺も、寺さ火つけて、盗んでい  
ったっていうふうなことが分かりや困るってことで、火つ  
けて焼いてしまえば焼けたべっていうふうな、そんなふうな  
ことを考えるわけだな、そんなふうなことからして、寺に  
火をつけて、そして逃げたと。

ところが、和尚さんが泊まって、・・・（聴き取れず）・・・  
朝々に顔洗うとき、洗面器見たつけせ、洗面器の中さ水鏡  
にその寺が燃えてるとこ、のぜいたと。いうふうなことで、  
和尚さんがしこたま、ごしゃがいた（叱った）と。

だども、その宝物はねえし、そういう人がただって村に  
いれなくなって逃げてしまつて、夜逃げをした。というふ  
うなこと。南天の鞍の行方はわからねども、その、本物の  
観音様だかどうだか、昔のことだから分からねえわけだど  
も、その観音様でねえかっていうふうなものが、現在その

トサワの方にあるっていう。

だども、寺の刻印とか、そういうふうなもの、何も押し  
てねえことないしろ、今になつてもその寺のもんでねえか  
っていうふうな話だけで、はっきり寺のものだつていうふ  
うなことは言い切れねえっていうふうなことで。

ねずみ浄土

（萱ヶ沢）

性根の悪いじいさんと性根のいいじいさんと二家族あつ  
て、それで性根のいいじいさんが、ある山さ柴切りに行つ  
たところが、昼間だったもんだために、おにぎり、焼きめ  
し食べようと思つて、食べる前に山の神様さあげるってい  
うふうなことで、木の根っこに、こう、にぎりめしをあげ  
たところが、にぎりめしがころころころころとまくれたと。  
で、じいさんがそれ追っかけて、どこどこまでも行つたわ

せ、穴に焼きめしがすぽーんと落ちてしまったと。そして、

「さあ、穴さ落ちてしまった。こらいねえな、なあにあらだども 穴さ落ちたって虫とかなんだかかんだかが食うべや、したらまず、ばっちゃん待ってらっついていそ行こか」  
って、そう思っていたところが、ねずみが一匹出てきてでせ、

「今せ、たいしたいいごつつおしてもらったす。今度せ、おらごつつおすべい」  
って、

「おいのしつぽさたぐって、いいって言うまでせ、まなこ絶対あかないできい」

というふうにしてじいさんがせあとついて行って、今度ねずみが、

「あつこんど、じいさん目あいてもいい」

って、言ったところがへ、立派な御殿さ行って いい料理つけてもらって、でせ、

「猫でもいいねば、この世は極楽だ」

ねずみは猫がいねば、極楽なはずだな、そういうふうなこ  
と・・・で、そのじいさんも、

「ごつつおになったもんだし、ばあさん待ってるから帰るぞ」  
って言うて、みやげにその宝物、つづらしよわせて またねずみが送ってきたと。

ところが、そのばあさんが、

「じいさん、どこせ行って来た」と

こういううわけでせ、こういうふうな、今いっばい物もら  
ってきたもんだと話してせ、それを聞いてたとなりのひこ  
ひこ、まあひこひこっていうふうな言葉はよ、ひこひこば  
んばっていうだどもな。性根が悪かったり、根性が悪かっ  
たり、それからその、落ち着きがなくて何でも人から聞いた  
ことをとなり近所さふれ廻して歩くっていうような人を  
昔の人は、ひこひこばんばっていったもんだもんな。その  
ばんばが聞いてきて、自分のじいさんおるせ、

「じい、ほれ、となりのじいちゃんがこういうことしてせ、



宝物しこたまあげーものもらってきたきや、じいも、は、  
行ってやってくれい」

て言ったところが、あんだってか、焼きめし持って行って  
木の根っこさあげたども、焼きめしまくれねわけだ。とこ  
ろがせ、

「いえっ、この焼きめし、まくれねったらまくればいい  
でねかっ」

って言って、まくしてそして（焼きめしが穴に落ちると）  
やっぱねずみが迎えに来てせ、しっぱああしてけれってい  
うふうなところしていたっせ、やっぱ最初のうちはごっつ  
おして 宝物とかそういうふうなもの いっぺえ飾ってある  
もんだ。

このじいせ、このねずみさえいねば おれ、これ全部持つ  
ていくべえ、というふうなことで 猫のまねしたわけだ。そ  
うしたところがせ、ねずみが、

「そらーっ、猫が来た」  
っていうふうなことで、皆逃げてしまったけ、真暗になっ

てしまったもんだけ・・・（聴き取れず）・・・じゃあなつ  
と穴から出はってくるにせ、きたねえ格好になってせ、ん  
でまあ、ではってきた。ところがせ、ばんばは、

「ああ、今にせ じさ宝物しよっていっぺえ持って来らい」  
って、あるいけないってもの皆焼きはらっては、そしてい  
たところさ、きたねえかっこになって帰ってきたって、そ  
ういうふうな内容のことだけどな。

田沢の辰子姫

（萱ヶ沢）

辰子姫の話っていうふうなことはよ、あれはまず本当  
か・・・（聴き取れず）・・・知らねえけどよ、今、田沢湖  
行けば辰子姫の銅像建ってるな、そいであすこのところに、  
その、シドケナイというふうな部落もあるし、と、辰子つ  
ていうふうな人が絶世の美人で、そんでいつまでもせ、そ

ういうふうな……(聴き取れず)……なわけ、年をとりたくねえと。そういうふうな願いのために、その観音様さ願をかけたっていうふうなことなんだよな。

三百二十一日の願をかけて、そして、満願の日になって、辰子が行っただす、その川今でも言えばイワナ……(聴き取れず)……沢さにいるその魚っこせ、とって食ったわけだ。ところがのどっかけてよ、なんかもできなくて、それで最初きねすくって飲ぎだども、なんかも出来なくて、伏さって飲んだって、飲んでたらそしたら今度はあたりが欠けてよ、大きな湖になってしまったっていうふうなことだよな。

んで今度せ、夜さになっても辰子が来ねえもんだから、この母がせ、松明ふりかざして、

「辰子、辰子」

と、叫んで歩いたったんだよな。と、見たこともない大きな湖ができてたもんだつす。さて、これはなんとしたことだとして、それでもせ、

「辰子」

と、叫んだところが、波がたつてきて、そこから最初、辰子の顔で出たあとだよ(母が辰子に)、

「なしてそこへいる？」  
「なしてせ(辰子が)、」

「おれはせ、こいうふうな身分になってしまつて、あと  
はせ、帰られねえ」

つてそれで、

「いつでも会いたくなつたら、ここさ来てくれ」  
と。

「だども、おれはいつもさこいうふうな姿でもつて見せることはできねえつす。本当はこいうふうな姿になつたのだ」

と、こいうふうなことで、この竜の姿でもつて現われらつて。

ところがへ、母もどご(動転)してしまつて、

「この、親不孝者！」

つてことで、持っていた松明を投げたつていうんだよな。

それが、松明が泳いだ・・・（聴き取れず）・・・というふうなことで、あつこにキノヒリマスっていうふうな、（田沢湖の土産物で）燻製にしたような、ああいうふうなこれぐらゐの魚を売ってつるんだな。

今はまず、その水がよ、玉川の害す田沢疎れで玉川の汚れたすべ、だからその魚は絶滅してしまつたども、もとはそこに、そのキノヒリマスっていう、そういうふうな魚がいたもんだつた、というふうなことだよな。

八郎瀉の八郎

（萱ヶ沢）

八郎太郎っていうふうな者は、男鹿に南祖坊っていうふうな者がいたつたわけだな。男鹿の新山、本山に南祖坊っていうふうな修行坊主がいて、八郎は秋田の方の八郎瀉にいたつたわけだ。

ところが領地争いからあつて、南祖坊と八郎太郎とたたかつたども、とうとう南祖坊に負けてしまつたもんだ。負けてしまつて結局、八郎瀉と田沢に、男鹿の新山・本山は南祖坊にとられてしまつたわけだ。それで八郎瀉にしかいられねくなつたと。

ところが、あつこは浅いべ、八郎瀉はな。それで冬が来れば凍るわけだ、冬がたびに。とにかくせ、ここでだつてできねつす、田沢湖は、年から年中凍らねつす。深いもんだつす。

っていうふうなことで、八郎太郎が今度田沢湖へ遊びに来て、で、この二人、仲良くなつたつていうふうなことだよな。

ツグメの薬

(萱ヶ沢)

シズガワのコスガ山というふうな所さ行けばよ、ツグメの薬っていうふうなもの出してるんだよな。これ、まあ、薬事法違反になるっていうふうなことでおおっぴらにはやられねえ。で、あれだども、ツグメ、そのまなこよ、目を、その、指、田の草取ったりなんかすると、指の先でまなこ、しーざりするたるべたきするだべ、すると、その薬つけると治るっていうふうなもんだな。

で、その家で八郎が、田沢湖さ通うとき、あるいは戻るとき、その家さ泊まったもんだらしいんだよな。そんなで、その女中さ(に向かつて)、

「おれのせ、その、寝てた姿は絶対見ねえでかい」というふうに言って、寝たもんだらしいんだよな。ところが、見てきいと言われれば見てえものが人情であつて、そんで下女つ子が夜に見てしまったわけだ。そうしたところがせ、その、いの、こういうふうな梁さ、このようなトグ

口巻いていてただってなことだよな、あまりその下女つこが気が動転してしまつて、は、人さま何も言わなかつたども、ま、震えてたわけだ。あんまりおつかなくて、はー。そうしたつけ、この朝々に起きてきたげ、りっぱな、朝になつて起きてきて、

「夕べおれの寝ている姿を見たな」

って、こういうふうに言つたつてんだな。んで、

「あと、おれはここさ来られねえ」

って、

「そのかわり、今まで何十年っていうふうな間、やつかいになつたことだから、このひとつの玉をくれる」

と。これをツグメの薬っていうふうなことで、これをおわにかわにおろして、粉をつけると治るからっていうふうなことで、玉をくれたつていうふうな。

それは家の秘伝なのであつてよ、他の人の、その家を継ぐ人だけそれを受け継ぐもんであつてよ、あと、嫁つことか、よそわきられていく人は、それは絶対手を触れたり

ねっていうふうな言い伝えが残ってる。

### 女米木山の鬼

(萱ヶ沢)

(女米木山に) 鬼が来てせ、あまり里さ来ていたずらするもんだために、神様がせ、

「あすこさ、鳥コ、一番ドリが鳴くまで石段をくつつけた・・・(聴き取れず)・・・らせ、どういうふうなことしてもいい」

というふうなこと言っただっていうふうなことだよな。ところろがへ、鬼がだへ、一生懸命やって、やって、もうひとつだっていうとき、ニワトリコの鳴くマネの上手だ人がかげさ隠れてて、それこそ積まれてしまえばせ、そこ鬼のすみかになってしまおうし、というふうなことでトリの鳴きマネしたわけだ、鳴く。ほしたつけせ、鬼がこの、

「さあ、一番ドリが鳴いちゃった。暗えが、もう朝かね」というふうなことで逃げてった。

いうふうなことで、今あそこの高尾権現っていうふうな神社あるわけだども、あの上の方にな、そのところに石段、鬼が築いた石段だとかよ、それからその鬼がいたときにとった鬼の相撲取り場だとか、それから鬼の腰掛け椅子だとか、そういうふうなものあるわけだ。

### 獅子頭の話

(萱ヶ沢)

田村麻呂将軍が蝦夷征伐に来たときに、あまりにもせ、(賊の抵抗が激しかったために、祈願しようとして) 十二面の獅子頭を彫ったと。

したところが、出来て飾ってみたところが、あまりにもひとつがせ、出来映えが悪くって、ナタでもって割ろうと

したら、一天にわかにかき曇ってきて、あやめもわからねえだけに、空も明けてきたたと。・・・(聴き取れず)・・・それが一瞬のうちであって、そんでへ、その・・・(聴き取れず)・・・もやめたつけせ、今割るぞってした獅子頭がいねえわけだ。さあ、どこさやった、かこせやった、いうふうなで、とうとう分からねって。

そのうちに、その大沢の方の椒沢(※)ってところにあるもんな、そのうちの、その、ばっさの獅子頭が・・・(聴き取れず)・・・さて、この獅子頭だれ持ってきた、かれ持ってきたっていうふうな、でもだれも持ってきた人も分からねえことだし、そうしたうちに、その女米木の高尾山で坂上田村麻呂がそういうふうなことをしてせ、・・・(聴き取れず)・・・そしてその獅子でねえか、その獅子だ、というふうなことで、今、椒沢にある獅子頭がそのときに飛んで来た獅子頭だ、というふうな伝説が残ってる獅子頭が椒沢にある。

(※) 椒沢Ⅱはじかみさわ(はつかみさわ)

### お地蔵様が盗まれた話

(萱ヶ沢)

(昔、大内町の中俣と大正寺の神ヶ村、碓田、萱ヶ沢の四つの部落がお地蔵様を作った。)

大正十二、三年頃になって、神ヶ村というところの人たちがよ、自分たちの方さ盗んで行った・・・(聴き取れず)・・・自分たちの方さ、地蔵様、ありがたい地蔵様をたくさん持っていていくつていうんで、この村の人がた、萱ヶ沢の人がたさ何も話しねえで持っていてしまったもんだ。

ところがその、一年も二年もしまつうちに、その、神ヶ村の地蔵様持ってた人がたが、昔で言えばまず、赤痢とか、そういうふうな悪い病気にかかって死んだり、なんだってしまったって、で、やっぱり地蔵様つれてきたせいでないか、とかよ。それがためにそうなたとかつて、人のうわさ話にのぼって、それを聞いた萱ヶ沢の人たちが・・・(聴き取れず)・・・中俣の部落の総代さんとかよ、そういうふうな人と相談して迎えに行つたっていうふうな記録が

あるんだな。

そして、神ヶ村の人がたが持つてくときは、非常にその地蔵様が重くて、しょう（背負う）もおぶるも担ぐもできなくて、ひとつの流れから沢さまくし落とした。・・・（聴き取れず）・・・

ところが、萱ヶ沢の者がとりに行つてくるときはせ、軽くつて、ひとりできつさとしよつてきさつた。ところが、頭がもげてるもんだために、今度こつちさ来てからに、首をくつつけたつていうふうなことで、ここ今セメントでもつてくつつけてるな。

萱ヶ沢のはじまり

（萱ヶ沢）

長円寺の祖つていうふうな人は、坂上田村麻呂が征伐に来たときについて来たひとりで、一方の旗頭だったつてい

うふうなことなんだよな。それが、そこを、田村麻呂が帰るとき、高尾山の領地をおさめるとき、そこに残ったもんだつて。で、その人が、本当の名前は京極対馬守つていうふうなことで、京都から来たもんだつてことだな。

で、高尾山を平定して寺建てたりして、で、まず一応おさまつたもんだために、自分の子供二人のうちの一人をそこさ残してで、自分でリョウサイという子供を連れて、で、萱ヶ沢のこの奥の寺ノ沢ていうところあるども、このところに住み着いたその人が、後にそのリョウエンていう人に、真言宗の僧侶の名前に変えた。

それが、代々、まず五人代が現在になつてい。おそらく、それが一番先に萱ヶ沢さ来て聞いたんでねえかつてこととでねえか。

## 伊勢参りの松

(水沢)

よその人が訪ねてきてよ。その人方が伊勢参りに行ったとき、水沢という所の松右衛門という人が一緒に伊勢参りをしたということで、その松右衛門に会いたいということでしたよ。松右衛門、松右衛門ってうちはないんですよ。松右衛門って名前はないん。これは、その、一緒に水沢の松右衛門という人が、一緒に伊勢参りをしたっていうんですよ。

ちょうどその話のときが、伊勢参りしたって期間が、松が枯れて、その人方が帰って来たときには、松がまた青い葉っぱが出てきて松がまたよみがえって、また、あの元通りの松になったと。

こういうような由来で、松が伊勢参りに行ったと、こういうことなんです。それで、村の人が何のために枯れてったのかをみんな心配してたところが、後で松右衛門という人が私方と一緒に伊勢参りに行ったということで、会いに

来た人がいた。それで、これが人でなくて、松であつたんだなあ、ということ、それで、その松の根元で、その人方と一緒に部落の人方と酒盛りをして、帰ったことをお祝いしたと、こういうことなんですよ。

## 伊勢参りの松の話

(平沢)

そこに大きな松があるわけです。その松が伊勢参り……(聴き取れず)……その松が、何かして、いい加減なこと言ってもあれだなー。うーん、春の彼岸に枯れたわけですよ。春の彼岸に、とにかく枯れだしてきて、非常にそれこそ村の人たちは、たいへん、いやこれはどうしたことだとか。それを見ておって、何だべと思つて心配したわけですよ。

そしたら、秋になつてから、いまでいう敦賀つてところ



があつたしね。そこから四、五人の有志がね、

「水沢に伊藤松右衛門っておりますか」

って訪ねてきたわけ。松右衛門はおらないわけだし。

そして、その話を聞くと、昨年春だしな、春、伊勢参りに行くとき、本当に、老人の風格の方が道案内してくださって助かった。と、こういうわけだな。敦賀城の人が、それでそのおかげさまで、お参りしてることができたと、喜んで来たわけですよ。

それで村の者が、松の精が、それこそお参りに行って来たんだなと、それでこの松は、秋になったら元通りの青くなってきたなというんだから、その精であつて、伊藤松右衛門と松が名乗っていたんだなあと。

川むかいの山に

(平沢)

砦が昔あつたわけですな。天正年間の冬のうちに、まあ落城したわけです。そのときに、その若い娘が、非業な、それこそ非業な最期を・・・(聴き取れず)・・・焼け死んだわけですな。それでその怨念が残つておつてあれです。ここの下、昔であれば、ここ、ほれ、舟でそれこそ交通しておつたもんだから、まあ、舟で往来する。まあ、嫁入りするつていえば、こつちから、山の下に行く。

どうしたわけか、その舟に乗つて、それこそ川上の方のぼるといふと、まず無理してのぼつてゆけば、必ず破談になつたり、なんかそれこそ、いいことはなかつた。それで、山のはずれから、その下を歩いてまた乗つたり、これは、あのそうですな。昭和二十年頃まで、そういうことが、ずっと守られていた。

獅子頭の話

(平沢)

橋を渡ってこっち来たけれど、反対の方へずっと行くと、妙法という所があります。そこには、その獅子頭があるわけです。全然雨の降らないとき、その獅子頭を村のはずれの方へ行つてよ、川の奥へ沈めるわけで、沈めて何だったけな・・・(聴き取れず)・・・、三日三晩沈めて、そしてお祈りするわけですな。まあ要するに雨乞いですな。そうすると、必ず雨が降ってやったという。

ところが、その獅子頭、こう大切に保存しようと、ひとつのお室だすなその、ある大工さんが、そのお室をこしらえて、それを入れようとしたら、お室が小さく入らないって、それで、どっちだかのほっぺを削ったら、それからご利益全然なくなつたって。

水沢のお宮のご神体の話

(平沢)

水沢のお宮のご神体は、僧形八幡という。それでその、きれいなお姿をしているって。その、今は完全にすっかりしているけれども、昔であれば、腐れたりなんかして、雨漏りしたりして、乞食が宿にして、泊まつておつて、それで見たら、あんまりきれいだったので、夜明けに盗んで、ちよつとお宮から出て、西の方さ行けば、急に歩けなくなつたんだって。

そしたら、だから今度は、朝で、朝に仕事に行く、その見つけられて、取り戻されたって。そんな話は聞いたことがあるな。

ご神体の石の話

(平沢)

この村に、きんぴらのご神体になっている石があるわけですな。それがここに二か所あるんですよ。そして、その石が、この村のある人さの枕元に立って、夢見てたって、それで、

「この山奥の方のそこにありますので、ここにいます」  
って教えたら、村中の者が、石引っ張って来たんですな。  
そしたら、その村までのこと、また向こうの方に一部落あつて、二つで平沢って構成してるけど、その山から出張(てば)って来て、その村の中間まで来たら、日暮れてしまつて、また次の朝まで集まりしよと言つて、日暮れたもんだもの・・・(聴き取れず)・・・、次の朝行つてみたら、石が二つに割れてあつたつて。それで下の方さいた者は下の方さ持つて、上の方さいた者は上の方に、一つの石き二か所に祀られたつて。

そんな話は、ずっと子供の時分も聞いてあつたども、ど

うもあの神のご利益によつて割れたけれども、ちようどその割れ目がよ、大きさも同じだし、かつこも同じだもんな。一度スケール(巻き尺)持つてつて測つたら、だいたい同じなんだもんな。だからやっぱりあれは一つの石であつたなあと・・・

水沢のはじまり

(水沢)

善左衛門と仁右衛門つてありますけど、これは兄弟であつて、来た。流れて来たというのは、あの一、あれはあの敦賀騒動さ巻き込まれて、あの敗北した。そして、むこうへおられなくなって流れて来たものと。だから住んだあとを見ると、こういうふうな隠れ隠んで、やっぱり生活したというのありますよね。

そして結局、水沢に最初は来てあつたけれども、あれはあの、点々として歩いたらしいですな。そしてまた、最初

に来た水沢って一番いいと言って、そして三人兄弟でいましたけれども、一家はわからんということになっている。

これがそもそも水沢というはじまりの伝説でありますな。

### 河童の話

(平沢)

水遊びにも、川に遊んでいる子がいたら、長く入ったりしていたらば、河童につかめられるぞと脅かされて、早く帰って来いよと、そういうこと言われたことあったって、脅かされたこともあった。

### ひとはね沢の話

(平沢)

その娘が非業な最期をとげ、ここ……(聞き取れず)……建て主、城主って言えばわかりやすいかな。城主が今度逃げたわけですな。その逃げるときに、今度あそこから下りてきて、そして、馬に一休みして……(聞き取れず)……水飲ませたところ、そこに水飲み場って、その地名だけれど、俗に、水飲み場ってありますよな。そこで、ひとりで水飲ませて一息入れて、そして、まあ、沢です。山と山の間のひと飛び飛んで、その沢を越えたところ、ひとはねに越えたから、ひとはねの沢っていうんだ。

### 神のおつげの話

(平沢)

明治二七年の三月だから、今の四月だから、子供の火遊

びで、ここの村が半分くらい川むかいまで焼けたことあったしな。

その前の晩、ここの村中の馬がひずめの音高くして走って歩いて、姿はなかったけれども、ずっと、行ったり来たりして馬が走ってあった音が聞こえたというな。そしてつぎ次の日が大火があったって。これはいえばきつと神様のおつげであったと。

### 笹竹の話

(平沢)

その神様の話すれば、あそこに、笹竹あったけれども、境内にあの笹竹だしな、あれあってよ。境内の中に別の小さいお宮があつてよ。あの大武大幡大明って、別棟になつてありますわな。そのの周りに、笹竹ありましてな。その明治二七年の戦争があつたし、そのの笹に昔の鉄砲の格好

さして、笹枯れてあつたと。

笹が枯れてくればみんなそうなるけど、やっぱり武の神だからって、お参りに来てあつた。この前はなかったけど、ずっとそういう形してあつたって聞いたな。

### 狐の話 ①

(中ノ沢)

狐ば、よそのご祝儀、帰りにご馳走さ全部山に広げてきたとか、家に帰ったとき、なんも持たずに風呂敷だけ持ってきて来たとか、そういう話はよく聞いたな。私ら小さいときだ。それは。今のよう交通機関が発達してないから、どこさ行くつても山から山越えて歩いたもんだからな、やっぱり、そういうことあつて、その人目覚ましたら、田んぼの中なんてあつたとか。そういうことはな、やっぱりあつたな。

夜になれば、ざくざくざくって、そういう音するとかつてな、狐だつてとかよ。子供のとき、そういう話はあつたな。

してほれ、子供のとき、そこらへんさ川で、きれいな川だつたもの、たとえばそのとき、わらじの根を、あのたたいて、沈殿させてあの片栗とつたわけだ。そのな、その川でやってるんだとも、その音が夜中になれば、しないだもの、それが狐来てやるとかそういう話はあつた。

## 狐の話 ②

(中ノ沢)

今のそのカチカチ山というような話で、狐に化かされたときの話とやや似てるでねえか、あの、狐に化かされるのは昼の明るいときでも、そういう目にあう人はあの、何も

分からなくなるものらしいな。

で、とんでもない方、水の中さに入ったりな。そして水の中で、川の中やつとこいで歩かないとならない。そういうふうにしてると騙すだまもんだな。そういうふうやってまづ、その人の持つているものが、昔は、あの何か、ご祝儀とかそういう、ご法事とこさ行つてくれば、必ずその狐の食らえば好きなものしよつていたもんだもな。それを全部盗られてしまうもんだから。

だから結局、カチカチ山の話はないども、やっぱりその自分の担いだものとか、全部広げてな、狐に化かされたら、みんなそこでご馳走してくるんだとかね。

## 比丘尼淵の話

(中ノ沢)

尼さんがいてよ。そして今度はその付近に麻織りしてよ。

そこにその比丘尼淵つてよ、そのまつすぐ下によ、二間く  
らいの川の所々に深い淵があつてよ、今もある、そこさそ  
の麻織りの布を晒さらしたもんだつて。ずーつとなつてるとこ  
ある、うん、そしてその中によ穴あるんだな。

そうして、そこに尼さんがな、あんだんだ昔その、風呂  
場も何もないもんだな。その川のその穴さ入つて、夏の髪  
を洗つたんでねえのか。そういつたこともある。そしてこ  
こに今、この上さ、しるしの松つて松あるんだな、そこさ  
その金埋かねけてそしてその、比丘尼淵つて淵さ入つて、そし  
て、死んだということだ。

そのやっぱり、最近の人で大正年間に、金埋けたつて話  
をしたつてことだが、今、そういうことは・・・(聴き取れ  
ず)・・・ほたるはあつた。誰もその金を見つけたものがい  
ねかつた。ほつたけどやっぱり見つけなかつたものな。

ただその、おらがやつと子供でまだ学校さ入らないとき、  
その長いとこで、ずっとやつて遊んで歩くによかつた。そ  
してその代わりに、こしらえて、穴掘つてたもの、川の水

が流れたら埋まるもんな。そして、掘ればよ、一文銭が、  
うんとではると、その当時は。その当時、飴玉一つ一文だ  
つたけども・・・(聴き取れず)・・・やっぱり、亀田の殿  
様が秋田に、二ヶ所くらい、偽金を作つたつていう。金を  
作つた跡が未だにあるつていう、その金のかすかなかすが。

## 【女米木地区の昔話】

※ここからは、昭和六一年度春・夏の女米木地区（春は全戸対象）の採話調査結果（再話）をまとめたものです。

### 狐に化かされた話 ①

ある日山に蕨をとりに行ったら、いい蕨がたくさんあって、だまされて、どんだん山の中に入って行った。家の屋根が見えているのに出てこられなくて。同じところをぐるぐる回っていた。

### 米子の話 ①

高尾山の七合目の松林のところに白石善五郎の屋敷跡がある。善五郎は土豪であった。善五郎には米子という娘が

あった。米子は背の高い美人だった。

そのうち、保呂羽山から来た夜叉鬼という修験者くずれの男が来て、米子を無理矢理嫁にしまった。大滝丸という子供も生まれたが、田村將軍東征の折に夜叉鬼らを仕留めようとして、夜叉鬼と大滝丸は男鹿の方へ逃げってしまった。人間の米子はそのとき殺されてしまった。米子が血を流して染めた場所を赤坂と呼んでいる。

米子が生きているとき、水鏡をとったところをミズクシと呼んでいる。

### 観音様の話

高尾山に観音堂があった。

あるとき、参拝に来た人が、ろうそくの火をつけたまま、忘れて帰ってしまった。その晩、高尾山の京極別当が眠っ



ていると、木彫りの観音様が炎につつまれている夢を見て、目がさめた。不思議に思っ、分家のおじいさんを起こして一緒に見に行ったら、左半分が焼けていた。

### 洪水のときの話

昔、大洪水があった。欲張りなおじいさんがいて、川の方ふちのところまで流れてくる薪を拾っていると、川の上の方から人が流れてくるのに気が付いた。見るとそれは立派な着物を着た女の人だった。女の人はおじいさんに助けを求め、助けてくれたらこれを全部やると手に持った財布を見せた。それを見たおじいさんは、女の人を木の棒につかまらせて、岸に引きよせると、女の人から財布だけ奪いとつて、女の方はまた流してしまった。

その後、おじいさんの家は、その財布の金のおかげであ

ったのか、裕福になった。

しかし、忘れた頃になって、その家では、夜、誰かが天井を歩いたり不思議なことがおこるようになった。それから、あまりいいことがなくて、おじいさんから三代目になると、病人が続いて出たり、財産を失ったりして、貧しい暮らしに戻ってしまった。

### 薬師様の話

お薬師様のお堂が大正寺と女米木の境にあつて、どちらのものかで争いになった。お薬師様を大正寺の方に向けておくと、いつのまにか女米木の方に戻り、女米木の方に向けておけば、そのままにいるから、そのお薬師様は女米木のものということになった。

## お地蔵様の話

おじいさんのおにぎりをお地蔵様が食べてしまったから、肩にあがれと言われ、おじいさんがもつたいない、と言うとお地蔵様がお土産をくれた。

隣りのおじいさんは欲張りだったので、何ももらえなかった。

## 狐の話

三時頃、狐の「げーん、げーん」

という鳴き声が山から聞こえたら、村の人が死ぬ、という。

## はぎの橋

ある夫婦の間に三人の娘がいた。しかし、母親が亡くなったので、その夫は後妻をもらうことにした。

その継母まははは、実は意地悪な女であった。そして、一番目の娘に、

「この鎌で柴を千本刈れ」

と言って、刃のない鎌を渡した。二番目の娘には、

「この桶で水を汲んでおいで」

と言って、底のない桶を渡した。三番目の娘には、

「この杉の葉っぱで火をおこしなさい」

と言って、濡れた杉の葉を渡した。

しかし、三人とも何とかして言われた通りにやってきた。

そこで、継母は二番目の娘が汲んできた水を釜に入れて沸かした。その釜に菘を渡して、娘たちに、

「この橋を渡れ」

と言った。三人とも、

「そんなことをしたら死んでしまう」

と言ったが、継母は強引に渡らせて、三人とも釜の湯の中に落ちて死んでしまった。

継母は一番目の娘の死体は便所の裏のところに、二番目の娘の死体は流し場の裏に、三番目の娘は馬屋の裏に埋めた。

父親が帰って来ると娘がいないので、どうしたのかと尋ねると、継母は遊びに行っていない、と言う。しかし、父親が便所に行くと、鳥が、

「萩の橋渡るとき、キュウライカッポケタ」

と鳴く。流しに手を洗いに行ったときも、馬屋に行ったときも同じように鳥が鳴く。不思議に思った父親が、掘り返してみたら娘の死体が出てきた。

## 狐に化かされた話 ②

狐が家の人に化けていて、風呂をすすめるので入ってみると沼だったり、秋田市から来る観光客に魚を売って、あとで魚を見ると葉っぱになっていた。

## 米子の話 ②

善五郎の一人娘で米子という娘がいた。米子は背丈が七尺もあるたいへんな美人であった。田村将軍に追われてホロウ山から高尾山に逃げて来た夜叉鬼という鬼と米子は結婚した。

二人の間には、大滝丸という子供まであったが、その後、夜叉鬼の後を追って来た田村将軍と戦って敗れ、夜叉鬼と大滝丸は男鹿の方へ逃げた。米子は人間だったので捕まっ

て殺された。

鬼が逃げるとき、ふんばってつけた足跡が相川に残っている。また、米子の櫛が落ちていたところをミズクシと呼んでいる。

### イシダの森の白狐

ある男が、

「いい女と結婚したいなあ」

と思いつながら道を歩いていたら、イシダの森からすごくきれいな女の人が出てきて、その男と結婚した。そして男の子が生まれ、その子供を『ドンジ丸』と名付けた。

そのうちに女がいなくなってしまうので、男は子供を背負って、

「ドンジ母ー！ドンジ母ー！」

と呼びながら歩いた。三日目に女の人が出てきて、

「私は狐だよ。あんたが、『いい女いなか』と言っていたから出てきたんだよ」と言った。

### 米子の話 ③

米子という娘がいた。米子はよく高尾山に遊びに行っていた。高尾山に鬼がやって来て、米子はその鬼と結婚した。しかし侍がその鬼を退治しに来たので、鬼は男鹿の寒風山へ逃げってしまった。娘は人間だったので、鬼のように飛んで逃げる事ができず、侍に殺されてしまった。

娘が殺されたとき、血が流れて赤く染まったところを赤坂と呼んでいる。

米子の話 ④

白石善五郎の末の娘を、夜叉鬼が強引に嫁にした。田村麻呂将軍に征伐されて、男鹿の方へ逃げて行った。その子孫が秋田市の海辺に住んでいる。

ムジナに化かされた話

法事にまわっていて、お土産に油揚げをもらって背中に背負っていたら、盗られてしまった。

狐に化かされた話 ③

およばれされて、帰りに引き出物をもらった。家に帰っ

て、子供たちにそれを食べさせていたら、いつの間にか山の中に座っていた。

米子の話 ⑤

田村将軍が来て殺された。子の大滝丸は新屋から男鹿へ飛んで逃げた。今はこんじやくの岩屋に行つて暮らしている。

【補遺】再話

白根館の杉

(水沢)

蛇の首かけ松

(水沢)

ある大きな松に、大蛇がお腹の中のものを消化するため  
に休んでいた。そこへある娘が来て、その様子を見て、び  
っくりして狂って死んでしまった。そして、娘の父親が、  
その大蛇を憎いと思つて大蛇のいた場所へ行つてみると、  
まだいたので、刀でその大蛇を切り殺してしまった。

昔、白根館の殿様が落城していくとき、とても残念だと  
言つて、ご飯を食べる箸を二本、山の頂上に立てた。そし  
て、その二本の箸は、やがて大きな杉の木になった。その  
杉の木の周りにはいつも白い蛇がいた。その杉の木を切る  
と祟りがあると言つて誰も切ろうとしなかった。

次の年、父親がまた同じ場所に行つたら大蛇骨が残つて  
いた。父親がまた憎いと思ひ、その骨をわらじで踏みつけ  
た。すると、その骨が足に刺さつて、それが元で父親は死  
んでしまった。

鯉女房

(相川)

それ以来、その松は切られなかった。

ある男が、おつゆを美味しく飲ませてくれる女房が欲し  
いと言つていた。すると、ある日、

「私が美味しく食べさせてあげましょう」

と、女が現れた。そして、その女を女房にしたところ、この女房の作るおつゆが、これがまた、とてもうまかった。

女は、おつゆを作るとき、毎回、梁へ鍋に水を入れて上がって行って、下に下りてきて煮る。そして男には、梁に上がって行ったとき、自分を見に来ないでくれと言う。

しかし、見るな、と言われると男はどうしても見たくなくなり、こっそり見に行ったところ、なんとその女房は鍋の水で体を洗っていた。男は怒って、そんなおつゆは飲めないと言って、その女房を追い出してしまった。

男は、出て行く女はどこへ行くのかと思ひ、後をつけてみると、なんと女は家の裏にある池の中に入り、鯉の姿になって、泳いでいった。

なぞなぞ

(安養寺)

『うえしたすぐでん、なかとくでん』

とかけて何と解く、と言えよ、

『敷居と戸』

だとかつて、そんなこと言ったのよ。こんど、

『とべ行く道、はべ止める』

ちゆうな。

『戸と柱』

のことだなや、やっぱりそれも、な。この戸だすべ、そして柱だもの。戸、行く道、柱が止めるから、ばたつと、な。そういったこと聞いたもんだ。

「つつと行けば都賀の国、帰りは加賀の国、中はとろとろ薩摩の国」

つてあれなんだべ。『かんな』でねえべ、おじいちゃん、かなでねかった？かなだな、大工のかな・・・

【雄和町の民話（話者と題名）】

〈題名の下に数字は、掲載ページを表します。話者名とカッコ内の居住地区名は、採話当時のものです。〉

【民話】

中村善一朗（新波）

斎藤家の白い蛇・・・・・・・・・・七

下女の淵・・・・・・・・・・九

斉藤善清（新波）

狐火・・・・・・・・・・九

伊藤正男（町屋敷）

大蛇が犬をのんだ話・・・・・・・・一〇

田村麻呂と観音様・・・・・・・・一一

狐にからかわれた体験談・・・・・・・・一一

黒崎キヨノ（安養寺）

しゅうとめの改心・・・・・・・・一二

佐々木清一郎（東又）

山の神様の不思議な伝説・・・・・・・・一二

浅野リヨ（大金）

ムジナにつかれた体験談・・・・・・・・一三

加藤寛蔵（萱ヶ沢）

宝物が盗まれた話・・・・・・・・一四

ねずみ浄土・・・・・・・・一五

田沢の辰子姫・・・・・・・・一七

八郎瀉の八郎・・・・・・・・一九

ツグメの薬・・・・・・・・二〇

女米木山の鬼・・・・・・・・二一



獅子頭の話・・・・・・・・・・二二

お地蔵様が盗まれた話・・・・・・・・二二

萱ヶ沢のはじまり・・・・・・・・二三

伊藤公一（水沢）

伊勢参りの松・・・・・・・・二四

伊藤八右衛門（平沢）

伊勢参りの松の話・・・・・・・・二四

川むかいの山に・・・・・・・・二五

獅子頭の話・・・・・・・・二六

水沢のお宮のご神体の話・・・・・・・・二六

ご神体の石の話・・・・・・・・二七

水沢のはじまり・・・・・・・・二七

河童の話・・・・・・・・二八

ひとはね沢の話・・・・・・・・二八

神のおつげの話・・・・・・・・二八

笹竹の話・・・・・・・・二九

加藤チエ子（中ノ沢）

狐の話①・・・・・・・・二九

加藤文次（中ノ沢）

狐の話②・・・・・・・・三〇

打矢武次（中ノ沢）

比丘尼淵の話・・・・・・・・三〇

【女米木地区の昔話】

石井さくら

狐に化かされた話①・・・・・・・・三二

加藤加助

米子の話 ① . . . . . 三二

観音様の話 . . . . . 三二

洪水のときの話 . . . . . 三三

石井勝夫

薬師様の話 . . . . . 三三

お地藏様の話 . . . . . 三四

狐の話 . . . . . 三四

安藤 登さん宅で

はぎの橋 . . . . . 三四

狐に化かされた話 ② . . . . . 三五

石井 治

米子の話 ② . . . . . 三五

京極嘉一郎さん宅で

イシダの森の白狐 . . . . . 三六

長谷部てるお

米子の話 ③ . . . . . 三六

長谷部源三

米子の話 ④ . . . . . 三七

石井作郎さん宅で

ムジナに化かされた話 . . . . . 三七

安藤光子

狐に化かされた話 ③ . . . . . 三七

石井宇一

米子の話 ⑤ . . . . . 三七

【補遺】

伊藤ツナ（水沢）

蛇の首かけ松・・・・・・・・三三

白根館の杉・・・・・・・・三八

皆川ふみ江（相川）

鯉女房・・・・・・・・三八

黒崎キヨノ（安養寺）

なぞなぞ・・・・・・・・三九

## 【民話採訪調査の思い出】

「みちくさ」く雄和への旅（その一）

追調査で九月の最後の一週間、秋の雄和町を満喫してきた。夜行列車が朝の領域に入ったのは、山形県あたりだったと思う。だんだん夜が明けていく東北の農村風景が、それまでは列車の内部の様子だけを映していた窓ガラスを通して、夜を徹した、ぼけた頭にさわやかな無声の印象となつて、入ってきた。

秋田駅、朝九時。よく晴れていて涼しい。北海道にいた頃に感じていたような、特徴のある風、何か懐かしい匂いを運んでくる風がとても心地良かった。今、我が家に滞在している祖母によると、僕の先祖は秋田県人らしい。

「みちくさ」く雄物川

やっぱり雄物川は冬がいい。下見調査で初めて雄和町を訪ねたときは、まだ二月で、あたりは真白。まさに銀世界だった。バスで秋田市から来て、雄和町に入ってしまった。そこから雄物川が見えてくる。あー、なんてきれいなんだろう、と思った。

その後は、春と夏しか見ていないけれど、初めて見たときの川の色とは全然ちがっていて、物足りないような気がしてしまった。

しかし、冬の雄物川の美しさは、長くて厳しい北国の冬の色そのもののようにも思われるのである。

雄和町というところは、町のまんなかに大きな川が流れていて、それに各支流が流れ込んでいくつも沢をつくっている。沢に沿って田んぼがあつて集落が形成されている。当然、沢と沢、となり合う沢の間には、それを結ぶ道というのがめつたにない。なぜなら、山が（低い山だが）あるからだ。

ところで、僕が秋田で買った雄和町の地図に、ある沢とある沢を結ぶ道が記してあつた。僕は、その道があるなら、調査の時間が合理的に使えろと考へて山に入つていった。しかし道は十年前になくなつており、僕は一時間ばかり薄暗い山の中を迷つてしまつた。

雄和町の道路は良く整備されていて、どんな沢の奥にも、舗装道路が続いている。夏の調査でも秋の調査でも、何日かは自転車で町をまわつた。特に夏の最終日には、いたずらにたくさん走り回つてしまつた。後から考へてみるとひどく時間のむだだつたと思う。もっと集中的に行動すべきであつた。

その最終日には、道路のわきでパラソルをさしてアイスクリームを売つていたおばさんと話をしたり、空港道路にまぎれこんで、料金所で二十円をとられたり、いろいろとおもしろかつた。

「みちくさ」

夏の調査はずっとお天気続きだった。朝起きるとすでに暑い。調査から帰ってくると西陽があたるのもっと暑い。秋田の夏があんなに暑いとは思ってもみなかったので、驚いてしまった。東北も関東も、夏の暑さという点ではほとんど変わらないようである。

でも、秋の調査のときは、私は行かなかったので聞いた話だけでも、秋田はとても涼しかったというから……

「みちくさ」

やっぱり秋田は寒かった。千葉の夜はそんなに寒くないので、追調査（秋）には寝袋ひとつでいいべ、と思っていたのに、雄和の夜は死ぬほど寒く、いきなり旅館に泊まってしまった。宿泊費七千五百円は予定外だった。くやしい。

「みちくさ」

僕は、今回、雄和町に、春と秋の二回訪れました。春の雄和と秋の雄和は、比較できないほど両方とも素晴らしく再び訪れたいと思います。しかし雪のまだ積もっていた春の調査は、忘れることはできないでしょう。

そう、それは、まだ雪でおおわれている高尾山、山水荘への山道は、全くわからない。その雪で方向がわからない山道を安井さんと丸山さんは、うさぎのように、ぴよんぴよんとはねて行ってしまったのです。タヌキさんチームの僕と吉村さんは、雪の中に埋まりながら、とにかく追ったのです。後で気付いたのですが、タヌキはやっぱり重かったようです。

## 編集後記

この民話集を作成するために、録音テープから文字へなおす作業をしていると、そのお話を語って下さった方々、一人一人の顔が浮かんできて、そのときのことを思い出して、なんだか懐かしい気分になってしまいます。

しかし、この民話集には、語ってくださった人達の声ではなく、文字しか載せられません。文字にすると、とても味気ないものになってしまい、大変もどかしい思いをしました。そんな中で、ようやくこの民話集ができました。作成に御協力くださったすべての方、雄和町の方々へ、心より御礼申しあげます。

### 【民話分科会名簿】採話調査担当者

(教育学部四年) 宮木裕一      ほか 五名

### 『ゆうわのむかしっこ』

(秋田県河辺郡雄和町の民話)

一九八六年(昭和六一年)十一月一日発行

【発行者】 千葉大学日本文化研究会 民話分科会

【発行所】 千葉大学日本文化研究会

リポジトリ公開用覆刻版

『ゆうわのむかしっこ』

(秋田県河辺郡雄和町の民話)

【覆刻版発行者】

千葉大学(旧)日本文化研究会民俗資料編纂室

代表 日本文化研究会初代会長 加部恒雄

【覆刻版発行日】 二〇一九年九月一日

<https://doi.org/10.20776/106364>